

木場・深川に新社屋完成 ～木をふんだんに使った社屋を紹介～

日刊木材新聞社
新木場担当

日刊木材新聞は9月30日に木造3階建ての新社屋を竣工しました。木材を現しに使用した木造3階建てで10月19日から業務を開始しました。この地域は準防火地域のため木造建築物にも建築制限が課せられていますが、準延焼防止技術適合基準(技適)建築物とすることで準耐火建築物と同等の扱いを受ける先進的な都市木造の建築物を実現することができました。新社屋は都市木造の先進的な設計構造となっていますが、今回は新社屋の内装・造作等をご紹介します。(詳細は日刊木材新聞社10月30日付「木造建築新時代・特別編⑩」)

日刊木材新聞社と新社屋について—

当社は1945年10月に前身である「木材タイムス」を発刊したのが始まりで今年75周年を迎えました。前社屋は築30年を経過し、手狭になったことから創刊75年の節目を機に新社屋の建設を計画した次第です。木場・深川は木材業者が数多く営む木材団地が形成された地域ですが、新木場への移転以降、木の街の面影は薄れ景観が変わりつつあります。戦後からこの地で木材関連の報道事業を営んできたものとして木材の街を意識した建物を目指しました。木材を主体とした新たな建築物が建設されることで木材の街の名にふさわしい景観を新たに生み出したいという願いが込められています。また、当社近隣には中学校があります。子どもたちが木に関心を持ってもらえるように正面玄関を開放的にした設計にも工夫を凝らしています。

新社屋での業務が始まり日は浅いですが、取材から戻ってくると桧の香りがして癒されています。なにより、自慢のできる社屋に生まれ変わったことが嬉しいことです。入社当初、弊社社長から「木材新聞は木場・深川の材木屋に育てられてきた」と聞かされてきました。これからも皆様とともに歩み、木材業界の発展に尽力していきますので引き続きよろしく願いいたします。

▷社屋データ

建物＝地上3階建て、延べ床面積375.82㎡、建築面積135.48㎡、

最高高さ9.97m、最高軒高9.47m

設計＝(株)IKDS 設備＝(有)ZO設計室

構造＝(株)KAP 施工＝(株)長谷萬

木造躯体工事＝SMB建材(株) 総合プロデュース＝小泉治

(間取り)

1階＝エントランス、木育ライブラリー、事務室、打ち合わせ室

2階＝編集室 3階＝会議室、社長室

新社屋のなかをご紹介ー

外観はガラスファザード越しに三角桧格子で木質感を際立たせています。夜になると三角桧格子から漏れる光が幻想的です。正面外壁はシリコン系塗料を施したタモ板を使っています。玄関はNCルーターで木の葉模様加工された木製両開きドア。基材はシナ材を使った共芯合板。「木の情報源」に導く入口をイメージしています。



本社外観・夜



本社外観

1階エントランスを入ってすぐのスペースには構造用集成材の柱を囲むように7段に及ぶ書棚が張り巡らされ、ライブラリーとしての機能を持たせています。書籍内側は来客用応接室です。内装、書棚は北海道産タモを使用しました。



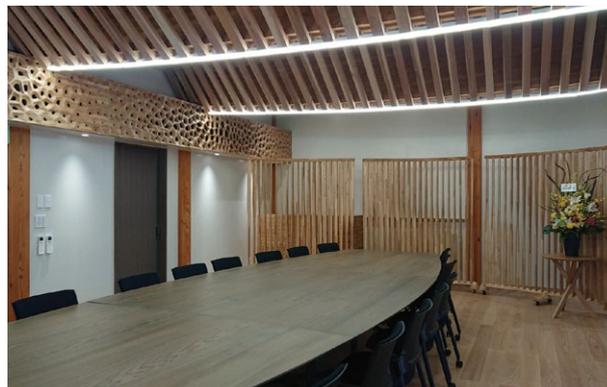
1階エントランス

編集室の執務机はスチール製ですが、共通資料棚は全てタモの特注家具です。特に設計者が工夫したのが新聞保管棚で週5回発行される新聞を日付ごとに保管できます。正面には三角柵格子が張られ、天井は桧無節のCLTを採用。CLTは3階床・2階天井でカーブ状に切断されており、2階と3階の吹き抜けになっています。また、CLTは3階から吊るしてあり、これによって2階は開放的な空間となっています。



2階編集室

会議室は天井部の梁せいを隠すように杉材頬杖が張り巡らされています。下から見上げると船底をイメージさせます。床はタモの2mm挽き板を張り合わせた土足用フロアです。テーブルは長さ6m、最大幅2.1m、厚み40mmの神代ニレです。北海道の十勝川温泉郷近くの工事現場から発見されたもので長さ6m、径級62cmの共木から製材しました。テーブルが大きいため3つに分けました。空調設備を隠すためにタモのフリー板をNCルーターでくり抜いて木漏れ模様を生み出しています。



3階会議室・社長室